

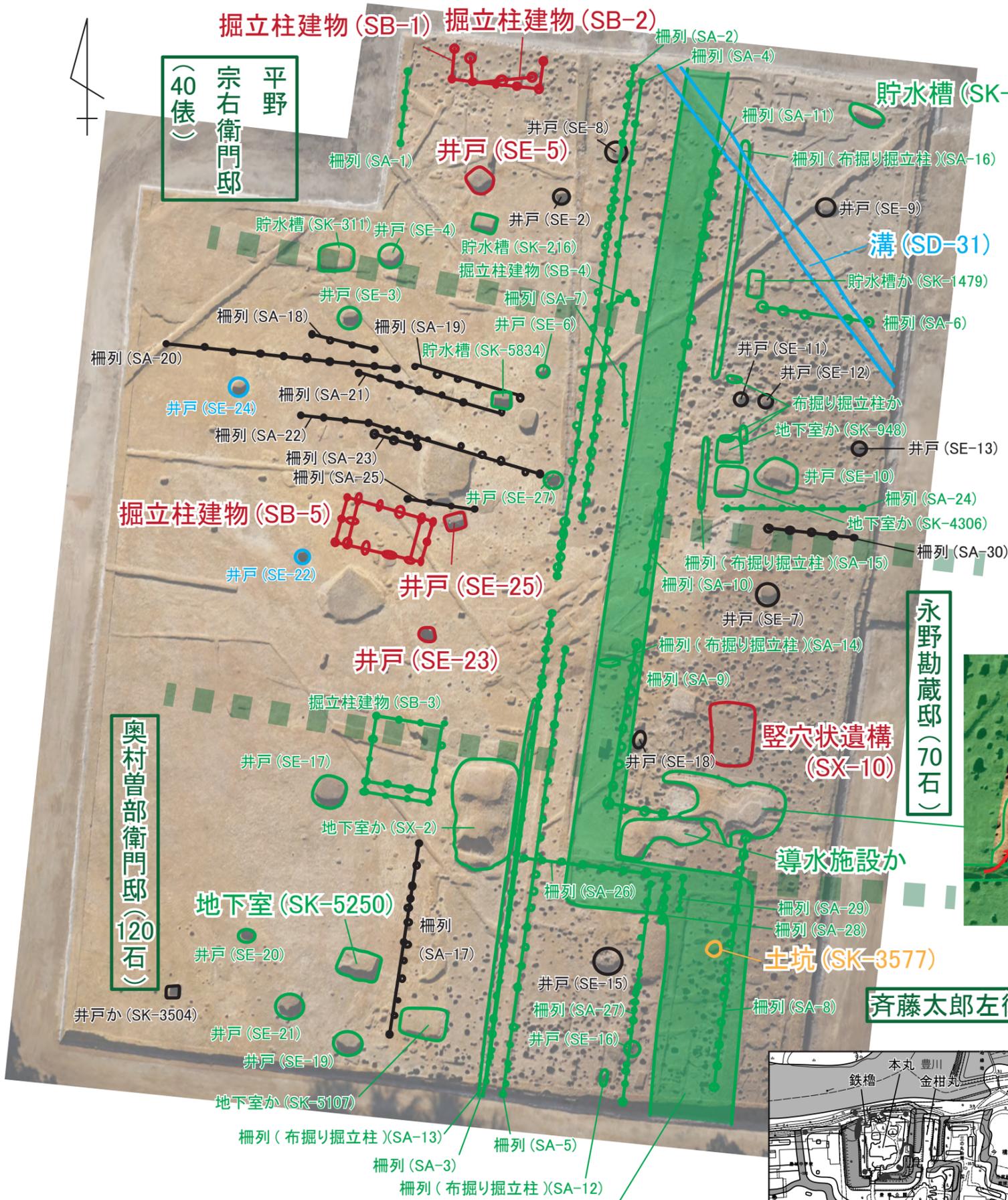
# よしだじょうし あくみ 吉田城址・飽海遺跡発掘調査現地説明会

2025.02.01

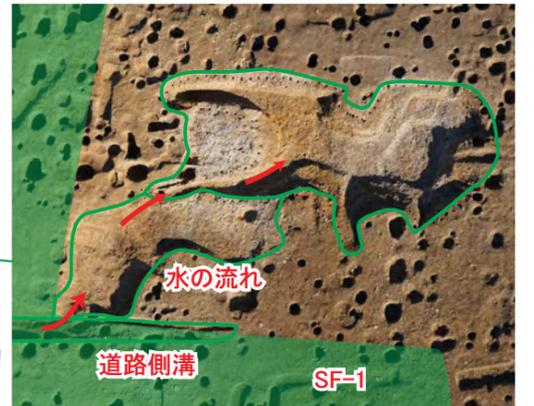
現在、豊橋公園内に位置する旧豊橋球場付近で発掘調査を行っています。調査区付近は、古代においては、8世紀ごろから渥美郡衙（役所）の推定地とされています。天慶3(940)年には、伊勢神宮に寄進され、飽海神戸と呼ばれていました。その後、中世に入っても伊勢神宮領として荘園開発等がなされました。明応6(1497)年ごろに吉田城の前身となる今橋城が、牧野古白によって築城されます。その後吉田城は、酒井ただつぐ、いけだてりまさ忠次や池田照政（輝政）などが城主を務めました。調査区付近は西に吉田城の主要部である本丸・二の丸・三の丸が位置し、近世には藩士の屋敷が広がっていました。吉田城絵図の中には屋敷地が表現されていたものがあり、区割りや藩士の名前などが見てとれます。

今回の調査では、上記の各年代の遺物のほか、弥生土器も出土しており、この土地の歴史を考えるうえで有意義な調査となっています。

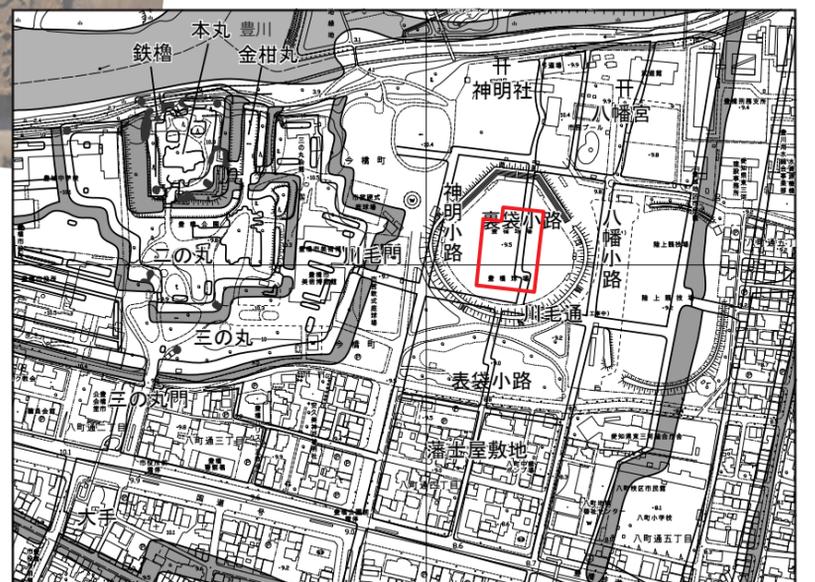
- 弥生
- 古代
- 中世
- 近世
- 近世屋敷地推定区割り
- 時期不明



※布掘り掘立柱  
柱穴と柱穴の間を溝状に掘りこんだ掘立柱。柱と柱を連結する横材を地中に設置するなどを目的として行われる工法。



道路（裏袋小路）(SF-1)



調査区位置図（平成28年度都市計画基本図に「近世吉田城の構造」（『市内埋蔵文化財発掘調査Ⅲ(H24・25)』をトレース）を合成）(1/7,500)

平野 宗右衛門邸 (40俵)

柴田権右衛門邸 (70石)

永野勘蔵邸 (70石)

奥村曾部衛門邸 (120石)

齊藤太郎左衛門邸 (80石)

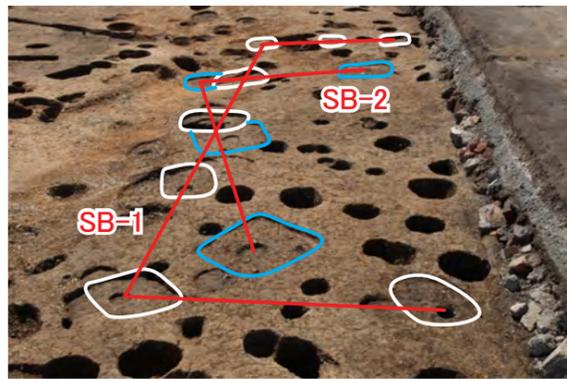
## 1. 弥生時代

今回の調査で出土した遺物で、最も古い時期と考えられる遺物は弥生土器です。特にSK-3577からは多量の礫とともに弥生中期後葉の土器がまとまって出土しました。遺跡周辺では弥生土器の出土例は少なく貴重な発見です。

## 2. 古代

今回の調査では、掘立柱建物や井戸など、古代の遺構が検出できました。SB-1・2は柱穴の掘方が方形、SB-5は長楕円形を呈する掘立柱建物です。SE-5・23・25は方形の井戸です。これらの建物や井戸は、いずれも特殊な形状をしており、郡衙に属する建物と推定できます。調査区東部では、竪穴建物の可能性のある落ち込み(SX-10)を検出しました。北側には埋土に焼土を含む土坑が接しており、かまどの痕跡の可能性がありますが、残存状態が悪く詳細は不明です。

また、出土した須恵器の中には、硯など渥美郡衙の存在を想起させる遺物も含まれています。



掘立柱建物(SB-1・2)



竪穴状遺構(SX-10)



円面硯出土状況(SE-5)



平瓶出土状況(SE-5)

## 3. 中世

今回の調査では、山茶碗や土師質土器など中世の遺物が一定量出土しました。しかし、中世に属すると考えられる遺構はあまり多くは検出できていません。今後の整理作業の中で検討していく予定です。その中でSD-31は古代から16世紀までの遺物を含む溝で、調査区を斜めに横断しています。区画溝と考えられますが、飽海神戸や今橋城などに関連する可能性も含め、今後検討の必要があります。

また、織豊期の遺物として、犬の土人形が出土しました。これは大坂城で出土したものと非常に類似しており、大坂から持ち込まれた製品と推定できます。



溝(SD-31)



犬形土人形出土状況

## 4. 近世

今回の調査で検出した遺構の多くを占めるのが、近世の遺構です。特にそのほとんどが江戸時代中期から幕末に属すると考えられる遺構です。主に藩士の屋敷地の遺構と考えられ、屋敷地を南北に縦断する裏袋小路と呼ばれる道路の痕跡(SF-1)が検出できました。他にも掘立柱建物や柵列、井戸などとともに、地下室(地下式坑)や貯水槽と考えられる大型の落ち込み、池(SG-1)といった特殊な遺構も多く見つかりました。特に池(SG-1)は、全国的にも同時期の同様の遺構に関する調査例は少なく、貴重な調査となりました。形状はおおむねひょうたん形を呈しますが、何度も作り替えが行われ、時期ごとに形状も異なっていたと考えられます。南西側は裏袋小路の側溝と接続しており、水を引いていた(導水)可能性があります。

遺物は、多くの陶磁器類や瓦、キセルなどの金属製品などが出土しました。陶磁器類は、中国からの輸入品など良品が含まれており、藩士たちの豊かな暮らしが想像できます。瓦の出土量は決して多くはないことから、瓦葺の建物は限られていたと考えられます。



地下室(SK-5250)

一部掘り残して段になっており、入口であったと考えられます。



池(SG-1)



貯水槽(SK-4980)

点線より下には粘土が塗布してあり、水が浸透しないための処置と考えられます。



「吉田藩士屋敷図(弘化4(1847)年)」

(『吉田城遺跡2』より転載)